

特集・〈中央〉から離れて

中央集権の社会を拒否して、独自の歩みを進める人々…



現在、われわれをとり囲む社会では、資本や権力が〈中央〉に極度に集中し、その巨大な力によって、われわれの生活や人間関係までもが、がんじがらめに支配されています。そのなかで、われわれの豊かな生命力さえも、しほりとられ色あせてしまっているのです。

だが、抑圧され疎外されながらも、自らの内にある〈中央志向〉をも含めて〈中央の支配〉を拒否し、生き生きとした自発性と本物の連帯をとりもどしてゆこうとする、本能的とさえいえる強靱な営みが、あちこちで息づいています。支配の頂点たる〈中央〉から離れたところからこそ、現在の行きづまりを突破してゆく新たな動きが生まれてくるでしょう。われわれの〈共同体〉の出発点も、そこにこそあります。

■ 共同体論ノート

ボクたちにとって「へき地」とは何か・続

ボクたちにとって「へき地」とは遠く、しかしまた、近いのである

西 勇

虚像としての「へき地」

今日、「へき地」は巨大な地すべりにも似て、大きく変動しつつある。

不徹底なものであったにせよ、戦後の農地改革が、農村経済のしくみに与えた影響は大きい。「へき地」村落の生産様式や、「へき地」社会の勢力分布も、この改革を契機として、かなりはげしく変化したことはいうまでもない。そして、資本主義の「へき地」社会への渗透は、「へき地」を資本主義的商品経済の中にまきこみつつ、他方では、そこで生活する住民の階層分解をうながしながら、「むら」から流離する住民たちを「まち」の産業労働者の中へ抱きこんでいった。これまで比較的安穩に、ひなびた里や邑として自給自足の《孤立の国》（チューネン）を営んできた「へき地」も、生産・流通・分配・消費などの経路を介して、資本制再生産機構の総過程

にまきこまれ、いわば素裸のまま資本攻勢の波をかぶることとなった。

こうした歴史的、社会的変化の中で、地縁・血縁というネットワークに縛られた第一次的な基底集団の上に累積されてきた共同体的な社会諸関係が、「へき地」村落の生産過程を直接に規定している資本制的生産諸関係と結びあつて、「へき地」社会の解体過程に多くのひずみをもたらした。そこに幾重もの複雑なヒタを刻みつけていることはいうまでもない。

ともあれ、「へき地」社会は、古いものと新しいものとの癒着や乖離、葛藤や相剋にさいなまれ、悩みながら、明日の人間社会への脱皮を目指して胎動している。かかる崩壊と解体の過程——それは半面では、また高度に発達した資本主義的再生産体制における再編成の過程ともいえる——に直面して、「へき地」社会は、もはややりし日のままの「へき地」社会でなくなりつつあるのである。

だから、「へき地」社会の基底をゆさぶっているこの地すべりの

歴史的現実を目をふさいで、「へき地」をいつまでも牧歌調的な詩情でうたいあげるのには、「へき地」を頭ごなしに「古い」とか「遅れている」などときめつけることと同様、「へき地」の実情からほど遠い地点に立った観念だといえる。それ故、現に「へき地」に襲いかかっている崩壊や解体の「ナグレ現象」を直視せず、それと対峙し得ないような発想では、いまの「へき地」社会の、したがってまた、明日の「へき地」社会への課題にたち向かうことなどとてもできないであろう。

とりわけ、「へき地」をめぐるこうした変動は、周知のように、

昭和30年代以降において目まぐるしい。

すなわち、GNP（国民総生産）の高率達成を誇るような産業優先政策の強行は、人口の移動流入に伴う過密・過疎問題をいたるところで噴出させ、社会的な地殻構造を大きくひきつらせたのである。とくに、昭和35年の「所得倍増計画」の一環として、産業立地小委員会の策定した「太平洋ベルト地帯」構想はこうした傾向に拍車をかけ、その趨勢を決定的なものにしてしまったことは否めまい。その結果、東北・北陸をはじめ山陰・四国・九州にいたる各地域にわたって広大な過疎地帯を造出し、そこに深刻な生活破壊の社会問題をひきおこしたことは、あらためて喋々するまでもあるまい。

高度成長経済政策に伴うこの地域間落差の懸隔が予想をうわまわる早いテンポで拡がったことは、昭和37年に発表された「全国総合開発計画」の中で、早速、地域格差は正の方針がうち出されたのをみても一目瞭然であろう。しかし、いくら口頭禪のように、格差は正の手をおしをうたいあげてみても、現実の進展はおさまるところか、過疎地帯における「へき地」の根絶やし政策は容赦なくおしす

層へ追いやられてゆくと、廃地棄民の政策にとり「へき地」とは、所詮、スクラップでしかない。すなわち、広域行政圏の中に囲われながらも、ひとたび「へき地」が投入される資本の限界効用に耐え得ない負担となるや、たちどころに弊履のごとく捨てさられてしまうのである。

それ故、ボクたちはここにこれまで「半端もの」、「余計もの」とあしらわれてきた「へき地」社会の宿業めいた一つの座位をみるることができる。しかし、かかる座位を固定して「へき地」像を凍結し、あたかもはじめから「へき地」とはこうしたものであるかのごとくにきめてかかるならば、これも一つの「虚像としてのへき地」といつてよからう。

それにもかかわらず、あくまで歴史的、社会的所産でしかない「へき地」の実態を一切の現実的諸関係から捨象して、こうした「半端もの」、「余計もの」としてのイメージや虚像にしがみつかせておけば、現実に「へき地」社会が崩落解体の根絶やしに直面しても、それを当然かのように甘受する心理的傾斜を準備してくれることになるであろう。したがって、「へき地」社会に対する自己の権益を確保し、管理を掌握する体制側の支配者層にとって、こうした「へき地」像がばらまかれ、実体化されるなら、これほど都合なことはないまい。こうして、せつせと「へき地」の虚像がまきちらかされることとなるが、これは明らかに「へき地」支配のために仕組まれた作為とみてよい。ここで捏造された「虚像としてのへき地」は、まきれもなく、一つの虚偽意識というべきイデオロギーとして作動するのである。

かかる虚偽意識としてのイデオロギーは、住民に対する支配者た

すめられていったのである。なるほど、池田内閣のあとを引きついだ佐藤首相が就任の弁の中で、「社会開発」という言葉で政策転換のイメージをにぎにぎしく飾りたてはしたもの、そんなことで「へき地」社会の重い現実が霧散消失するものではない。

今日、「へき地」社会に襲いかかり、そこに住む住民の生活を根こそぎにするものが、ほかならぬ廃地棄民の「政策」という公権力であつてみれば、風倒木のように崩れ落ち、やがて埋れ木のごとく朽ちはてゆく「へき地」の末路は、権力公害や政策公害のいけにえに供された地域の残生ともいふべきものであらう。

それにもかかわらず、「へき地」と言えば、そこに鳥がさえずり、花が咲きこぼれ、美しい自然や風土にとり囲まれた人情味あつりや邑として描かれるのはどうしたことであらう。ワーズワースの詩ではないが、「すべてこの世にこともなし」の樂園にも似て、あたかも地上の天国のごとく想念されるのはなぜだろう。なるほど、まだボクたちに知られざる秘境の地にこのような人里がひっそりと存在しているのかもしれない。いや、現に存在している「へき地」村落のいくつかが、実際、こうした人里をそこに営んでいるものもある。しかしだからといって、先述してきたような重苦しい現実を裏切つて、「へき地」というイメージの内実がすべてかかる甘ったるい詩情でうたいあげられ、桃源郷めいた景観に塗りつぶされてしまつたら、それこそ虚妄であり、その虚妄の集積の上に築かれた「虚像としてのへき地」でしかない。

こうした「虚像としてのへき地」の氾濫はすでに久しく、その様態もさまざまである。資本の論理に貫かれた巨大な体制構造のメカニズムによって、「へき地」がその下積みとなる社会的底辺の沈澱

ちがいつもあらゆる手段や奸策を弄してまきちらし、拡大再生産してきたところのものである。だからそういった意味では、なにも「へき地」イメージにだけ限つたものではない。たとえば、農民像に

対しても同じようなことが言われよう。すなわち、「百姓は、所詮、百姓」という決定論めいた宿命観の中に農民像を閉じこめ、その同語反覆にしかすぎない虚像の中へ農民たちをのめりこませてきたのであった。そうすることが「生かさず、殺さず」という支配者たちの処置に耐えられるような忍従や諦念を農民の心に植えつけ、培うことになったからである。たてまえの上で、「土農工商」と武士階層に次ぐ位置に擬せられたのも、平素は牛馬のごとくにあしらわれ、ひとたび支配者の逆鱗にふれるならば、たちどころに「斬り捨てて免」の対象でしかなかったことは本質的ななら変わってはいない。いかに美辞麗句で語られようと、もともと、田をはいずりまわる水呑百姓など、支配者にとっては、膏血をしぼりとられたあとは廃棄のうき目にあつても当然な存在者としてしか映じていなかったことはいままでもない。しかも、支配者は農民自らがこのような無残な生涯でも、それをそのままが運命と諦め、黙々としてそれを引きうけてくれることを求め望んだ。こうしてここでもまた、虚像としての農民像とその虚偽意識が農民支配のためのイデオロギーとして動員されたのである。その際、かかる虚像の中に登場した農民は、その死にざまの非業と悲慘ゆえに、一層その姿はけなげなものとして語られている。それは恰度、現代の「へき地」社会が廃地棄民の処遇にさらされるが故に、その姿はかえって美しく、桃源郷やエデンの園のように文飾を施されるのと全く同じである。

ハナシを「へき地」にもどそう。9月号でボクが「へき地」とは

何かと問いかけたとき、まずなによりも、ボクたちの「へき地」通念にひそむ加害者への加担意識を断罪することからはじめるべきだと力説したのも、以上のように、「虚像としてのへき地」がもつイデオロギー性の呪縛構造からの脱却を願う気があったからである。

ともあれ、今日依然として、「へき地」は巨大な体制構造の非情なメカニズムに収奪され、凌辱されている。その端々な表われの一つは「へき地」における「自然的なもの」の破壊と侵害であろう。

「へき地」社会にながく居住してきた人たちの本然の情ともいふべき滋味あふれるヒューマニティは資本の論理に貫かれた権力や権益の前でもろくも崩れ、住民特有の繊細な生活感覚も営利打算の強引なソロバン勘定によって醜く歪められてしまったことは確かである。ボクはなにも「へき地」に生活してきた人間を善人めかして聖者視する気はさらさらないけれども、彼らのパーソナリティを形づくってきた「自然的なもの」はもつとおおらかであり、まろやかであった筈である。それがどうだろう。差別と貧困、収奪と破壊のさなかに乱舞するカネの魔力や妖術は、一瞬のうちに、零細な農漁村に散在する寒地僻村はいうにおよばず、人里離れた離島や山間の辺土僻村までもおしなべて「カネが仇の世の中」へまきこみ、その住人たちを銭ゲバ同然の修羅のちまたにひきずり出してしまったではないか。

臨海工場地帯の造成が進展するにつれ、これまでのどかな海浜であった鹿島の漁村で、親と子が、夫と妻が、さらには親戚や近隣の人々がお互いに憎しみあい、騙しあい、ののしり、いさかい、そのはてには刃傷沙汰に及ぶていたらくについてはすでに周知のところであろう。同様なことはまた、かの陸奥（みちのく）むつの国々の

原野に点在する小さな集落でもおきている。すなわち、むつ小川原開発の構想が発表されるや、開発予定地の地価はみるみるウナギのぼりに騰貴し、数年前までは見向きもされなかった土地が百数十倍の値段で売買されるといった狂奔ぶり、土地をめぐる深刻な争いが連日のように展開されていると言う（「朝日新聞」七一年十二月二十六日）。

いずれにせよ、こうしたケースは今日の「へき地」社会だけに特有な事例だというわけにはゆくまい。なぜなら、それは資本主義社会ならどこにも遍在するありふれた社会現象の一つと言ってよいからである。また、「へき地」社会の命運とともに浮かびあがる者、沈みゆく者、その姿態はさまざまであるが、いずれも人生ドラマそのまのまの有り転変とみてよく、ここでもことさら「へき地」と結びつけて語るに及ぶまい。しかし、「へき地」に流れこんだ膨大な資本や巨大な資力が権柄づくで「へき地」社会にのさばり、「へき地」を食いものにし、やがては「へき地」を自己の支配の系列下に併呑してゆく経過だけはまぎれもない事実であり、しかも、この事実の裏側で、「へき地」とともに生き続けてきた「自然的なもの」は確実に損傷され、拉致され、破壊され、そして間違ひなく解体され、抹殺されてしまうのである。また、かつて「へき地」社会の共同体的規制や関係に支えられ織りつづられてきた義理人情の紐帯も、カネにくらみ欲にからんだ思惑によってズタズタに引き裂かれ、ひなびた精神の風土もめまぐるしく変質してゆく。ボクたちはこうした社会変動のテンポの加速が、山津波のように、予想をこえておそろしく速いことを知らねばならぬ。

今日、尾瀬が犯され、瀬戸が汚され、風光明媚を讀えた天然の絶

景や、山紫水明を誇った自然の景観も片っ端からうす汚い観光資本の手によって壊されてゆく。ボクたちは、もはや、そこが「へき地」だというだけで、自然風土の佳麗さを謳い、人情風俗の濃厚さを想うことを断念せずばなるまい。ところが実際には、ボクたちは *disorder*（あたかも——かのことし）の想念に酔い、「へき地」社会のどろどろとした生活の現実を詐って、そこに楽園浄土を安易に夢見してしまう。これでは、いつか述べたところの、かのアーバニズムの単純な裏返し of 的の発想にしかすぎないだろう（9月号参照）。

ともあれ、こうした幻視の中で「へき地」社会の現実を晦まし、虚飾の中で美化してしまうことは、自ら「虚像としてのへき地」の奸策に陥入ることにほかならない。だから、無邪気な「へき地」の礼讃や謳歌が、往々にして、「へき地」のきびしい実態や実情を見過してしまふと同時に、「へき地」に住む人間やその生活を無法にも圧殺する加害者の所在までも見落しかねないということを、今一度、充分気をつけておく必要がある。そしてくだいようだが、無知や怠慢のため、ボクたちが「へき地」の虚像をあたかも実体であるかのように担ぎまわり、知らずして「へき地」の加害者にくみすることのないよう、重ねて自戒せずばなるまい。

ボクに言わせれば、こうした懸念は「へき地」を外側から眺めようとする者だけに限られているのではない。実は、「へき地」に生活している者の内側にもひそんでいるのである。

たとえば、「へき地」のいいところを、もっぱら、いまの都会に無いようなものに見出し出して数えあげる発想などその一つである。すなわち、小鳥のさえずり、小川のせせらぎ、緑なす山々の木立ち、すみ渡った碧い空、そして清澄な空気などと、こうした人間生活

の自然的な側面を構成するいくつかの要素をあげて、都市環境に対する「へき地」の優位を強調したりするのがそれである。

なるほど、こうした主張が大方の共鳴を得ていることは間違ひないだろう。とりわけ、都市環境における自然度の低位と欠落は今日の都市空間に致命的な欠格条件として指摘されているだけに、自然環境のよさに関する「へき地」の優位は動かしがたい。しかし、どんな「へき地」社会であれ、そこでの生活が現実生産・流通・分配・消費などの資本主義的な経路や機構を介して営まれている以上、単に生活環境要素にみられる自然度の優位だけでは、所詮、辺境における生活空間としての里や邑はとて都市にかなうまい。資本の集積、情報の集中、管理機能の累積など、圧倒的な物量による都市の威力は「へき地」などものの数としないであろう。こうした力差構造を背景として、事実、快適な利便性や娯楽性を備えた都会生活の魅力は地方に住む多くの若者たちの心を次々奪い去ってしまったのではなかったか。

ここでボクは生活環境を規定する自然性や保健性、さらには安全性や利便性などをあげ、「むら」と「まち」を対比しながらそれぞれの優位性を論じようとは思わない。すでに前稿（9月号）で「まち」(urban)と「むら」(rural)という形態比較的な対置の発想が非生産的であるばかりか、アーバニズムの陥穽にも通じる危険なものであることを、すっぱくなるほど説いたつもりだが、いまここでもこうした「まち」と「むら」という二分法的な形で生活環境機能の優劣を競いあうやり方に同じような不満を覚えるのである。なぜなら、「あっちの水は辛いぞ、こっちの水は甘いぞ」式のやり方で、都会に対する「へき地」のよさを売りこむことは、逆に、その同じ

やり方で「へき地」に対する都会のよさを押しつけられる破目にしかならないからである。

ところが、先にみたように、こうした問題のある発想に依然がみついて、「へき地」は自らすすんで自分のよさを売りこもうとしているのである。しかしその結果、かかる売りこみと同じ手法で、逆に、「へき地」に求められない都会生活の素晴らしさを鼓吹され、それに幻惑され、一層強い向都性をおびただけである。しかも、実際のところ、「へき地」には都会を買いとる資力はないけれども、都会には「へき地」を買いしめる実力ないからでもある。だから、都会が自らの生活空間に欠ける自然度を充足したいと思えば、惜しげもなく資金や資本を投入して、「へき地」が売り出す「甘い水」などいくらでも買いしめることができる。たとえば、都会人向けの別荘地づくりというスローガンで、落目になった「へき地」の村有林や村有地を安く買いあさるなど、その一例といえるだろう。こうして「へき地」は自立の根拠や自存の基盤を失い、「へき地」として否定者でしかない都会の採算ベースや資本の論理の枠組みによって自分自身を売りしてしまっただけである。

「へき地」が本来的に所有していた「自然的なもの」を含めて自らをそっくり売り出した途端、「へき地」はもはや「へき地」それ自身であることをやめる。一般に「へき地」が「へき地」でなくなるには二つの途があり、一つは、「へき地」社会自らの手で「へき地」社会を変革し、その「へき地」性を止揚する場合であり、他の一つは、都会の汚れた手で改造され、そのことによって「へき地」性を消滅してゆく場合である。ここでは後者であることはいまでもない。すなわち、都会は待つてまじとばかりに僻村の閑地幽境

にブルドーザーを乗り入れ、山を崩し、道路を開き、原野を踏みあらし、またたく間に都会の分身ともいふべきレジャー・スペースをそこにつくりあげてしまふ。

「へき地」社会を蹂躪し、その「自然的なもの」を凌辱し去るところの都会の論理が資本の論理の転化物であることはいまでもない。しかし、ここで忘れてならないことは、こうした無残な「へき地」残酷物語を生み出す非情な資本の論理とその打算を呼びこみ、それらと通じるような体質や発想が、実は、「へき地」の内側にも息づいているということなのである。だから、「へき地」にとり獅子身中の虫ともいふべき、こうした加害者と相通じするような内側の論理を自己否定的にのり超え、その呪縛をたち切つてゆかねば、「へき地」社会の真の解放も、それを目指す根拠地づくりも決して成就しないだろうということをは忘れてはならない。

以上、ボクは「へき地」の虚像でしかないイメージが、「へき地」通念とともに、あまりにも氾濫しすぎている状態に気がかりなもののだから、二つの側面から「虚像としてのへき地」を論議してきたつもりである。すなわち、一つは、外から「へき地」社会を眺める者たちが往々にして固執しやすい「虚像としてのへき地」にひそむところの陥穽についてであり、もう一つは、「へき地」社会の中で生活する者たちが知らぬ間に囚われがちな「虚像としてのへき地」がもたらすところの呪縛についてであった。そして、この外側と内側のそれぞれのパースペクティヴの中に浮かびあがる「虚像としてのへき地」は、一方ではどうしようもない無間地獄として、他方では稀少価値をもつ桃源郷として、一見、相反する姿態や相貌を呈している。しかし、資本の論理という一つの視点からみれば、この両面

は高度な独占体制への再編過程にある「へき地」社会の解体作業を支えるイメージ操作として相補的に結びついているものなのである。したがって、ボクたちは体制ベクトルの志向にあわせて「へき地」を解体再編しようとする資本の論理をきり返し、それと対決できるような、ボクたちにとつての「へき地」の論理の構築をこそ一刻も早く期さねばなるまい。この構築作業が遅れば遅れるほど、変革のための拠点地形成はいよいよ後退し、「へき地」社会の非業な死にざまよりは一層その加速を強めることであろう。

「へき地」の「外」論理・「内」論理

すでにみてきたように、「へき地」はいまや丸抱えて都会へ自分を身売りしはじめ、そこに居住する人たちは生計の糧を求めて彷徨し、札束の魅力に憑かれて里を離れ、村を去り、都会のアスファルト・ジャングルの中へ埋没してゆく。挙家離村によるゴースト・タウンが死せる骸のごとく、ひっそりと残照の中にたなずまっても、なお人はその詩情をうたうべきだともいふのだからか。

かつて、寒地僻村の住人たちは国家が配った一枚の赤紙によって妻子からひき離され、故郷をあとに戦地へおもむいた。いまた、故郷を離れて出稼ぎに出かけた彼らは一枚でも多くの紙幣を求めて都会沙漠をさまよい、妻子訣別のうき目に耐えている。こうして彼らから地域を奪い去り、肉親までも引き離すものの本質において、一体、過去と現在、戦前と戦後にどれだけの相違があろう。

さびれたままの荒野や海辺、廃虚と化した茅屋に人影もない里や

邑、それらはそこに住む人を失い、人を失うことによって生命力も枯らせてしまった「へき地」が残滓としてわずかに残ったところの《死んだ光景》といえよう。確かに、かつて人間が住み、悲喜こもごもの会話や交際がとりかわされた生活の場だった「へき地」社会はこのように抹殺される。しかし、国家や資本にとって「へき地」は決して死滅したのではないのである。なぜならば、これら地域のあるものは自衛隊の演習地やミサイルの試射場としてよみがえり、またあるものは巨大な産業資本に誘導される工場立地や強大な観光資本に隷属する開発基地として再生しているからである。こうした解体と再編のすさまじい変貌ぶりは、今日、スクラップからビルドへというよりも、むしろビルドのためのスクラップ化といった方がふさわしいほどの急変ぶりである。

「へき地」であるというだけで甘受しなくてはならないこの不遇なしうちは、しかし、天命ともいふべき絶対命法のごときものでは決してない。そもそも、「へき地」の命運は、明らかに、政策によって倍加され、増巾され、濃縮される一つの《状況》なのである。

この《状況》に刻印された「へき地」性なるものも、実は、政策によって生みだされ、それ故また、政策によって改廃されもする事件や条件だといえよう。したがって、歴史的、社会的所産でしかない《状況》を具有する「へき地」社会の構造解明とその意味把握は、そのおもむくところ、こうした政策を策定実施する体制構造の内奥にまで肉迫し、そのメカニクの中核機構を采配しているものをこそ断罪せずばなるまい。

ここでボクたちは、まず、「虚像としてのへき地」をふり払い、「へき地」社会を「外」から規定している諸条件や諸要因を正しく

分析把握する論理の確立を期す必要がある。こうした論理の展開は、「へき地」社会に住む人間の心情も、人間の生活も、いや、人間そのものまでもバラバラにし、ズタズタに引き裂き、疎外と破壊の渦中に追いやるものが何であるかを凝視し、それを告発することではない。廢地棄民、スクラップ・アンド・ビルドの政策と、かかる政策を生み支える体制との連関の中で、「へき地」社会の位置づけや変動の意味づけを全体として明らかにしてくれるような論理を、一応、ボクは「へき地」の「外」論理と名づけておきたい。

要するに、「へき地」の「外」論理とは「へき地」社会の現実を規制している今日の状況や動静を克明に考察し、それに基づいて状況突破の歴史的動向を的確に洞察できるような、社会科学的なマクロ理論の体系のことなのである。

それでは、「へき地」社会の認識のための「外」論理が確立されればそれで充分かといえば、決してそうではない。すでに述べたように、「虚像としてのへき地」の虚偽意識を許し、それに晦まされる弱さや脆さが、案外、「へき地」社会で生活する者の内側にもあった。だから、ボクたちはこうした「へき地」の内部的弱点を克服するとともに、人間社会への根拠地形成を目指す創造的な視座を確保するためにも、「へき地」社会に内在する生活構造や人間関係などを内側から照らす新しい共同体理論をこそ積極的に展開しなくてはならないのである。ボクはここでも、この「へき地」社会に内在的な理論の体系を、先の「外」論理と関係づけて「へき地」の「内」論理と呼んでおこう。ただし、誤解のないようことわっておかねばならないが、ボクがここで「外」といい「内」というも、決してそれは機械的に分離されたり、便宜的に二分されたりするものではない。

者たちの共同体への志向が、本当に、こうした運動につながるのだろうかという疑問なのである。こうした疑問になると、正直のところ、ボクはいささか否定的ならざるを得ない。だから、ボクの心配事というのも、案外、この心もとなさからくる憂うつに起因しているのかもしれない。

ともあれ、なぜ、彼らは「みやこ」を遠く離れ、山間辺土の地、草深い狐狸の里に生活のねぐらを求めようとするのか。なるほど、自ら求めて「へき地」にやってくる以上、彼らはそこに何かを発見しそれを手にするかもしれない。そして、何もなければ、またそこを出てゆけばすむことだ。だがしかし、「へき地」にとってはそうはゆかない。かりそめにも、「へき地」が彼らから期待したり、受けとったりするものがあるとすれば、それは一体何だろう。事実、「へき地」にもぐりこんだ彼ら若者たちは、これまで述べてきたような問題、とりわけ、「へき地」社会に根づいてその地を内側から変革しようとする「内」論理の確立や実証の問題に、はたしてどれだけ醒めた意識をもって身を寄せているだろうか。

ボクにとって口惜しいのは、学園や街頭での激しい政治闘争による挫折感や虚無感から、彼らが心の傷を癒し、精神の空洞を充たすべく漂泊の旅に出かけ、その放浪のはてにたまたまたどりついたのが「へき地」だという、ただそれだけの理由で「へき地」が彼らにとって存在することなのである。

なるほど、現実逃避の形であろうと、憔悴した肉体や魂にとつて「へき地」が休息や憐れみの地となるなら、それはそれでいいではないかという考え方もできよう。しかし、そう映じた限りでの「へき地」は、かの胎内復帰の願望をかなえてくれる母親のふところにも

い。それは「へき地」社会に関する統一的な全体認識を構成する契機や側面として、お互いにかみあい、きり結びあっているものであることはいうまでもないのである。

確かに、現代社会の巨大なうねりに翻弄されながらも、なお、「へき地」は一つの生きた生命体として、さまざまな状況に処し、いろいろな制約に即しつつ、現状の閉塞を突破する未来への飛翔を求めてその方途を模索している。それは、喧騒と疲弊のあまり、創造的な生命エネルギーを涸渇させた都会にもはや期待し得ない「生活の原型」を求める拠点地づくりと言ってもよい。しかし、そのためには生産と生活を一元化し、個人と社会とのつながりを回復する新しい共同体社会の理念をたえず現実問いかけながら、そこに現実の重みにも充分耐えられるような理論を検証しつつ、ヒューマン・スケールをもった集落形成にたち向かわねばなるまい。正直のところ、体制の変革にも及ぶであろうささやかな根拠地の形成に秘められたネオ・ロマンの道は遙かであり険しい。でも、「へき地」をめぐる明晰な「外」論理の確立と呼応した強靱な「内」論理の成就こそ、必ずやその栄光への道を探りあて、その前途を照らすかがり火となってくれることであろう。

さいごに一つ。共同体志向ということに関係して、ボクが心配していることを卒直に語っておこう。

それは次のような疑問なのである。すなわち、シコシコというかさむさむというか、冷たい政治的季節の到来が街頭戦や陣地戦で敗れた多くの若者たちを「共同体」なるものへ駆りたてているようだが、言葉の真の意味での共同体運動ということからみて、かかる若似た大地の愛を予感させるが、それ以上のものではあるまい。その証拠に、やがて傷痕もいえた大半の若者たちは刺戟のない単調さに無然としてその「へき地」をあとに旅立つてゆくことであろう。その行先が再び喧騒や狂躁の巷である都会生活かもしれないし、また熾烈な階級闘争の最前線であるかも知れない。いや、ひょっとしたら、風の吹くまま気の向くまま、行方定めぬ放浪三昧の旅路なのかもしれない。いずれにせよ、若者たちと「へき地」とのこうした形の出会いは、所詮、ゆきずりの縁を一步もこえるものではないといっているのである。

もちろん、こうした見方には反論もあるだろう。そしてたとえばかつての砂川反戦聖壕やかの三里塚団結小屋にたてこもる青年学生たちを見よというかもしれない。なるほど、この若者たちが街からやってきてそこに住みつき、文字通り、現地の漁民や農民たちと生活する一体となつて《敵》と闘いながら、同時に、地域生活の内部分変革の担い手にもなっているということを目指して言うのなら、かかる反証にボクはなんの異論もない。しかし、ハナシは多少やくざめくが、投宿した旅人の義理や「宿」飯の仁義から助っ人として果敢な地域闘争に馳せ参じるだけのことなら、それはどこまでも「流れ者」の論理や倫理であつて、こうした発想に限度があることはいうまでもないだろう。

確かに、衆寡敵せず、守勢の少ない現地闘争にとつて助っ人の助勢こそありがたいものの、助っ人はあくまで旅人であり流れ者であつて、いつかはそこを立ち去る人であることにはかわりはない。惜しまれつつ去る者は、映画「シエーン」ばりに、いささかしい気なのだろうが、あとに残るしかない者にはそんなカッコよさに酔うこ

とすら許されていないのである。

要するに、ボクの言いたいことはこうである。「へき地」の問題——その過去をひきずった現在や未来もひっくり返して、部落の解放がまた人間の解放ともなるような根拠地の形成という、「へき地」社会の否定的自己止揚の契機は、土着することを知らぬ「流れ者」や「漂泊者」の論理には決して介在していないということなのである。

「へき地」は単にそれが「へき地」であるというだけで変革のための解放区、革命のための拠点地となるのではない。「へき地」社会をどうみるか、「へき地」社会をどう生きるかという、「へき地」の「外」論理、「内」論理が問いかける主題と主体への切り込みがボクたちに課されるといつていいのである。かかる課題への応答があつてこそ、はじめて「へき地」はまさにボクたちにとつての「へき地」として、ボクたちの生きた現実となるのである。だから、ボクは流行めいた安っぽい心象風景として語られるような辺境論や、「へき地」社会の「外」論理・「内」論理の呼応とその実証をもたない心情レベルでの共同体論議にはあまりなじめないのである。

周知のように、わが国では「へき地」社会はながい圧政と収奪のもと、つねに虐げられたものとしての歴史を刻印され続けてきた。現にいままた、急激な社会変動の中で体制矛盾が堆積する最底辺の沈黙層として抛り出され、そこで多くの死活問題を噴出させているそれだけに、「へき地」社会のどろどろとした生活の中に居坐り、その深部から新しい人間共同体への一筋をひたすら凝視する住民たちの心底には、「へき地」という名の大地のさき、その焦熱地獄でのたうちまわった先人たちの魂魄が甦る呻きや怒りが宿っている。

るといつていい。

この土着民たちにももろ底深いエネルギーと結びつきながら、現在、ズタズタに寸断された「へき地」社会の無数の亀裂からもれ聞えてくる地霊の声を耳にし、そのうずくような息吹きを予感できる者にのみ、「へき地」ははじめてその重い心を開いて語りかけてくれるであろう。

かく、ボクたちにとって「へき地」とは遠く、しかしまた、近いのである。

(未完)

ある訴え

脳性マヒによる障害者は、長い間、世の差別・偏見による屈辱の中で苦しんでいる。そうした障害者のグループ「ぐるーぷ・はみだすかたわもの」は障害者の解放を求めて活動しているが、彼らの出したビラで「一般人」に力強く訴えている。その一部を書き出してみよう。

「『障害者』ばかりでなく社会で言葉において全面展開してから行動に移るカッコよさの中に、私たちの『生きざま』そのものを排除する何ものかを強く感じます。そしてそのように感じているのは、障害者ばかりではないはずです。皆さん、それぞれの生活の場で、生きざまをさらすことを恐れず、シコシコとかッコ悪い闘いを起こしてゆこうではありませんか。それ以外に『かたわもの』の闘いと、それぞれの生活の場でそれを差別抑圧してきた人々との闘いとは、結びつけないのですから。」

連絡先—板橋区南町二九—七 さくら荘内 遠藤氣付